

SHOW HEY シネマールーム

★★★★

燃えよ剣

2020年/日本映画

配給：東宝 アスミック・エース/148分

2021(令和3)年10月16日鑑賞

TOHO シネマズ西宮 OS



2021-137

監督・脚本：原田真人

原作：司馬遼太郎『燃えよ剣』（文藝春秋社刊）

出演：岡田准一／柴咲コウ／鈴木亮平／山田涼介／尾上右近／

山田裕貴／たかお鷹／坂東

巳之助／安井順平／谷田歩

／金田哲／松下洸平／村本

大輔／高嶋政宏／柄本明／

市村正親／伊藤英明

👁️👁️ みどころ

原田真人監督が、『関ヶ原』（17年）、『日本のいちばん長い日』（15年）に続く“日本の三大変革期”の最終章にしたのは、司馬遼太郎の国民的ベストセラー小説『燃えよ剣』（64年）。

新選組副長・土方歳三の人生は太く短かったが、バラガキ（不良）仲間だった近藤勇、沖田総司より少しだけ長生きし、五稜郭まで戦い抜いたのは立派。

そんな男の生きざまを描くのに、太く長く生きた渋沢栄一を描く『青天を衝け』と同じような“青春群像ドラマ”にしたのは如何なもの？たしかに回顧形式は便利だが、もう少しポイントをしぼったほうがよかったのでは・・・

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■原田真人監督が司馬遼太郎のベストセラー小説に挑戦！■□■

司馬遼太郎は『坂の上の雲』（68年）、『竜馬がゆく』（74年）をはじめとして、膨大な国民的ベストセラー小説を書いているが、土方歳三を主人公にした『燃えよ剣』（64年）もその1つ。2021年のNHK大河ドラマは『青天を衝け』。10月中旬の今は、幕末を終え、明治初期に入って大活躍中の渋沢栄一を中心にドラマが展開している。

武蔵国の血洗島村出身の渋沢は“太く、長く”生きた英雄だが、土方歳三（岡田准一）は“太く、短く”生きた武州多摩出身の“バラガキ”（＝不良、ならず者）だ。いつもつるんでいるのは、近藤勇（鈴木亮平）と沖田総司（山田涼介）だが、3人の中では土方が一番長く生き延びているのは少し意外。これまで、『関ヶ原』（17年）（『シネマ40』178頁）、『日本のいちばん長い日』（15年）（『シネマ36』16頁）を生み出してきた原田真人監督が、日本の“三大変革期”の最終章となる幕末を描いた本作は、どんなドラマに？

■□■回顧シーンから土方歳三年表をフォロー！その当否は？■□■

本作は、歴史的な名作『タイタニック』（97年）や『アマデウス』（84年）と同じように、回想シーンから始まる。これは、何とも便利な映画製作の手法だから、それによっ

て原田真人監督は、2時間28分という本作の中に、土方の生き様や近藤、沖田との友情だけでなく、幕末から明治維新に至る重要な歴史上の事実と、そこに登場するほとんどすべての歴史上の人物を登場させることに成功している。パンフレットには、『燃えよ剣』土方歳三年表』があり、1853年の黒船来航から、1869年（明治2年）に土方が35歳で死亡するまでのそれが網羅されている。しかし、その事の是非は？

1年間続くNHK大河ドラマなら、多くの人物を登場させても処理できるが、本作は幕末を疾風の如く駆け抜けた男の生き様だけにテーマを絞ったほうが良かったのでは？ちなみに、本作のパンフレットには内田樹（神戸女学院大学名誉教授）の「新選組の組織論」があり、そこでは「中隊長レベルの天才」として日本史上に異彩を放った土方に焦点を当てて解説している。近藤と土方との信頼関係と距離関係は面白いが、2人の間で土方は常にNO.2の立場をキープしている。新選組内では、①清河八郎（高嶋政宏）、②芹沢鴨（伊藤英明）、③伊東甲子太郎（吉原光夫）との権力闘争が鮮烈だが、その点では沖田を含め、“バラガキ3人組”の団結は固い。しかし、戊辰戦争が始まり、新選組残党が生きる道をどう選ぶのかについては、明らかに近藤と土方の考え方は分かれている。あくまで新選組副長の立場に固執した土方を描くについては、私は原田真人監督にはそこらあたりに固執してほしかったが・・・。

■お雪の登場の是非は？作り物だからOKかも？■

小説はあくまで小説だし、映画もあくまで作り物だから、嘘八百もオーケー！したがって、司馬遼太郎の小説『燃えよ剣』で、土方の恋人として登場するお雪はあくまで司馬遼太郎の創作だ。したがって、本作では「Based on the true story」と字幕すれば嘘になるが、作り物の映画なら、お雪（柴咲コウ）をどんなキャラで登場させ、土方との間でどんな恋模様を展開させてもオーケーだ。お雪が傷を負った土方を介抱し、恋に落ちるという設定は安易かもしれないが、前夫は京都奉行所の下級役人だったという微妙な立場を含めて、土方とお雪との恋模様の展開は如何に？新選組副長として厳しい戒律を作り、違反者は同じ副長の山南敬助（安井順平）でさえ切腹させた土方だから、「副長の恋人は、ひょっとして長州のスパイ？」そんな疑いがかかれば身の破滅だが、さて・・・。

幕末モノや明治維新モノに登場する女性は、篤姫などごく少数しかいないから、小説でも本作でもこのお雪の占める役割は大きい。しかして、柴咲コウの熱演は如何に？

■土方は所詮、中隊長？その政治力は？組織論は？■

前述のように、内田樹は中隊長としての土方を高く評価し、「戦闘集団はどうあるべきかについての洞察と、卓越した実戦成果において、近代日本の軍制史上でも、土方歳三は抜きん出ている」と書いている。しかし、同時に「惜しむべきは、土方の『カリスマ』が届く範囲は百五十人までだったことである」と書き、さらに「土方歳三には歴史的局面を転換するだけの政治力はなかった。」と書いている。たしかに、この評価は両者とも正しい。土方の中隊長としての組織論はその通りだ。

しかし、私が思うに土方が率先して行った軍隊の様式化は中隊長レベルの能力ではなかったはずだ。司馬遼太郎が『翔ぶが如く』（76年）で取り上げた長州の村田蔵六（大村益

次郎)は、“組織論の天才”だった。徳川慶喜が大坂城を撤退した後は、彼の組織論が“官軍”となった長州+薩摩勢の軍制の基本になったが、土方のそれは五稜郭の戦いを含めて、どこまで機能していたの？ひょっとして、土方は大村益次郎と同じような組織論を構想していたのでは？そう考えると大村益次郎は官軍を率いて江戸に攻め上るといふ重要な役割が与えられたのに対し、土方は新選組の残党を率いて抗戦するだけだったから、彼の構想していた組織論が現実に機能することがなかったのが残念だ。

■□■幕府が逃走する中、土方はなぜ五稜郭へ？■□■

私は2013年9月の函館、洞爺湖、札幌旅行で五稜郭を見学したが、そこでは榎本武揚の才能と土方の才能の融合が興味深かった。所詮、時代の流れに逆らうことはできなかったものの、「五稜郭の戦い」の見事さはいくら褒めても褒めすぎることはない。

鳥羽・伏見の戦いが始まり、いわゆる“戊辰戦争”が展開していく1868年の1月、徳川慶喜は旧幕府軍を見捨てて、松平容保らと共に江戸に“敵前逃亡”した。そんな中、石田村のバラガキ以来の盟友で兄貴分だった近藤勇が新政府軍に投降した後、35歳で処刑され、弟分だった沖田総司も27歳で病死してしまった。しかし、土方は新政府軍に占領された江戸を脱出し、大激戦になった会津戦争で松平容保も降伏すると、土方はなお蝦夷地に渡り榎本武揚と共に五稜郭に入り、徹底抗戦を宣言したからすごい。そのエネルギーは一体どこから？そしてまた、当時の彼の戦略は何か？

人間・土方歳三を描くについて、私はそこが最大のポイントだと思うのだが。そんな目で見ると、本作ラストに見る、土方の突進死のシークエンスは如何なもの・・・。

2021(令和3)年10月22日記